

事故対応と緊急時の対応・熱中症

事故や緊急時の対応について

●事故対応マニュアルの確認しましょう。（事務所にて常時閲覧可能）

1.異常事態と事故

利用者の急激な体調の変化等、利用者の身体に関する不測の事態に起因して生じる異常事態とサービスの提供を原因とする事故について、その状況を正しく見極め、適切に対応することが重要である。身体の損傷や過失の有無およびその程度により対応方法が異なる。

(1) 異常事態とは

適切な対応をすみやかに行わなければ後に障害を残したり、最悪の場合には、生命を脅かす事態。

(2) 事故とは

サービスの提供を原因とした過失により生じた事態。例)入浴介助中の転倒、所有物の損壊や紛失

2.異常事態・事故発生時の心構えと対応

(1) 異常事態発見者の心構え

1 あわてない

落ち着いて事故の状況や利用者の急病の状態を観察する。

2 安心感を与える

事故や急病は本人も驚きや不安があるため、安心させるとともに元気づけることが大切。

3 協力体制を整える

他のヘルパーや家族の所在がわかれば、連絡してすぐにでも協力を得る。異常時において速やかに対応することは、利用者の生命・予後および治療方針に重要な影響を及ぼす。適切な対応と責任の明確化のためには、利用者や家族の了解および、看護師の判断・医師の指示が必要である。

●緊急時の対応 研修動画 15分



<https://qr.paps.jp/eOile>

熱中症対策

1. 事前の体調管理

訪問前にヘルパー自身の体調を確認し、睡眠不足や体調不良がある場合は無理をせずサ責に相談。

2. 水分・塩分補給

喉が渇く前に意識的に水分と塩分を摂取することが基本です。経口補水液や塩飴を携帯し、汗をかいた際にはこまめに補給しましょう。利用者にも同様の指導を行い、脱水や電解質不足を防ぎます。

3. 環境調整

訪問先や移動先の室内の温度管理が重要です。エアコン等を適切に使用する。

訪問先では冷却スプレーや冷却シート、瞬間冷却パックなどのグッズも活用する。

4. 初期症状の把握と緊急対応

めまい、ふらつき、筋肉痛、こむら返りなどの初期症状を確認し、症状が出た場合はすぐに涼しい場所で休ませ、水分・塩分補給を行います。重症化の恐れがある場合は救急車を呼ぶなどの対応をする。

[裏面に続く](#)

熱中症ヒヤリハット事例

事例①：「大丈夫です」を信じてしまった

同行援護で駅から商業施設まで徒歩移動。利用者は汗が多く、返答も少し遅い様子だったが、本人が「大丈夫です」と話したため支援継続。到着直前にふらつき、ベンチへ座り込んだ。顔面紅潮あり。

原因：（本人申告を優先した ・ 異変観察が不足 ・ 炎天下で休憩なし）

防止策：（「いつもと違う」を重視 ・ 30分ごとの休憩 ・ 本人が遠慮して無理をする前提で考える）

事例②：帽子なし外出を見逃した

真夏の外出支援。利用者が帽子を忘れたが、「短時間だから」と出発。強い日差しで途中から疲労増大。

原因：（出発前確認不足 ・ 「短時間なら大丈夫」という油断）

防止策：（外出前チェックリスト導入 ・ 帽子、飲料確認 ・ 日陰ルート選択）

事例③：「汗をかいているから大丈夫」と誤解

屋外イベント同行。利用者は大量発汗。その後急に汗が止まり、反応低下。

原因：（熱中症症状の知識不足 ・ 重症化サイン理解不足）

防止策：（「汗が止まる危険性」を周知 ・ 意識状態確認 ・ 異常時は即休憩、冷却）

事例④：精神障害利用者の不調を見逃した

利用者が「イライラする」と訴え。その後、頭痛・脱力感出現。

原因：（熱中症初期症状として認識不足 ・ 精神症状と混同）

防止策：（身体症状確認 ・ 水分、体温確認 ・ 服薬影響も考慮）

事例⑤：室内だから安全と思い込んだ

利用者宅でエアコン未使用。利用者が倦怠感訴え。室温30°C超。

原因：（室内熱中症への認識不足 ・ 利用者への遠慮）

防止策：（室温確認 ・ 冷房使用の提案 ・ 室内でも水分促進）

●熱中症の応急手当 2分



<https://qr.paps.jp/GRdMH>

●障害のある方の熱中症予防ポイント（厚労省）



<https://qr.paps.jp/rn8Gs>

研修アンケートにお答えください



<https://qr.paps.jp/wnbvS>